

質的心理学 辞典

能智正博 編集代表

香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・
柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦 編

新曜社

質的心理学辞典

能智正博 編集代表

香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・
柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦 編

新曜社

は し が き

心理学を軸としながら社会学、教育学、看護学、医療・医学、言語学、経営学など多様な分野の研究者が集まり、2004年に日本質的心理学会を立ち上げてから15年が過ぎようとしています。その間、質的研究への関心はかつてない広がりを見せ、人文・社会科学のさまざまな領域で質的方法を用いた研究者や、質的研究を学ぼうとする学生・院生が増えています。学会自体も会員数が1000人を超える規模になりました。質的研究に特化して書かれた教科書や研究書も増え、書店に行けば、さまざまな学問分野を背景にした多様な質的研究の教科書が並んでいるのがわかるでしょう。質的研究の考え方や方法を学ぶための資料は、一見したところずいぶん増加してきたようにみえます。

その一方で、質的研究の広がりにはさまざまな用語の使用とテーマの拡散を招き、研究者相互のコミュニケーションを困難にしているという面もあります。質的研究の目的の一つとして、生のあり方の多様性を発見していくことがあるとしたら、現状は喜ばしいものとして評価できるのかもしれませんが。だからと言って、質的研究が何でもありの相対主義の混沌を目指しているわけではないのも確かです。質的研究の裾野が広がれば広がるほど、その土台を確認していく作業が必要になってくるのではないのでしょうか。

この『質的心理学辞典』は、そうした状況のもとで、日本質的心理学会の創立15周年記念事業として企画されました。学会はこれまでも、『質的心理学講座』全3巻（東京大学出版会、2008）、『ワードマップ 質的心理学——創造的に活用するコツ』（新曜社、2004）、『質的心理学ハンドブック』（新曜社、2013）などの企画・出版を行ってきました。これらの書籍は質的研究の啓発と普及に大きな役割を果たしてきましたが、用語の意味を調べたり概念の使い方を確認したりするような使い方には不向きだったのではないかと思います。

欧米では、学習者の便宜を図り研究者間の共通理解の土台を作り上げる機能を果たすものとして、用語集や事典が刊行されてきました。日本でも、シュワントの『質的研究用語事典』（北大路書房、2009）やブルアとウッドの『質的研究法キーワード』（金子書房、2009）などが翻訳されています。しかしながら、用語の選択が執筆者の学問分野にやや特化していること、日本の質的研究の現状の全体をカバーできているとはいえないこと、中項目～大項目の事典・用語集のため手軽には参照しにくいこと、などの限界を指摘することができるでしょう。

本辞典は、質的研究の背景となる理論や方法、そして近年研究テーマとして取り上げられることが多い概念や用語、そして人名をとりあげて、その意味や関連情報を簡潔かつ明快に整理し記述したものです。理論や方法にかかわる項目には、さまざまなレベルで質的研究を方向づける多様な概念が含まれていま

す。対象をどのようにみるか、どのように扱うかによって研究対象である現実の姿も違ってきます。質的研究のミッションの一つが、これまで見落とされていた視点から現実を見直すことであるとするならば、本書で提示されている諸概念はそのための有用なツールになるはずです。また、研究テーマにかかわる項目には、多様なフィールドとかかわりつつ発展してきた質的心理学ならではの多彩な項目が含まれています。それらは、日本の質的研究がこれまで何を問題にしてきたのかを示す具体例であると同時に、新たに研究を立ち上げていく際の水先案内の役割を果たすものになるでしょう。もちろん、そうしたテーマは質的研究の理論や方法と全く分かれているわけではありません。ていねいに読んでいただければ、テーマと問いが理論や方法と呼び寄せ、理論や方法がテーマや問いをより精緻なものにしていくというダイナミックな関係が、項目の間から感じられてくるのではないかと思います。

本辞典ができあがるまでの編集の過程について、少しだけ述べておきましょう。見出し項目は、はじめに編集委員の一人が暫定的に選んだ約300項目を基礎に、ほかの編集委員が項目を加えていきました。方法論関連の項目については、内外の質的研究関連の教科書や辞典を参考に、また、研究テーマ関連の項目については、『質的心理学研究』を中心にここ20年ほどの間に日本の学術雑誌に発表された質的研究論文のキーワードを参考にして、選択を進めました。人名項目についてもほぼ同様なのですが、ただ、存命の日本の研究者については、その多くが学会員であり客観的な紹介・解説が難しいということもあって、今回は見出し項目には含めておりません。その後何回か編集会議を重ね、日本の質的研究の全体に目配りをしながら取捨選択や統合を行った結果として、最終的には一般項目984、人名項目114、計1098項目にまとまりました。

執筆するには、日本質的心理学会の会員を中心に、ベテラン、中堅、若手を問わず、その項目に関して幅広い知識と経験をもっていると考えられる方に依頼させていただきました。また、会員でカバーできない項目については非会員の先生方にもお引き受けいただき、おかげで記述の内容にさらなる広がりや厚みが出たように感じます。それぞれの執筆者から送られてきた原稿は、複数の編集委員が読み、必要に応じて執筆者と何度かやりとりを行って、全体のバランスを考えたり形式を揃えたりしながら、現在の形になりました。お忙しいなか執筆の労をとってくださり、場合によっては何度もやりとりをして記述をより精緻なものにしてくださった執筆者の皆様に対しては、感謝の念に堪えません。

編集の過程ではいくつか、予想しなかった困難にぶつかりました。その一つが訳語の問題でした。辞典の統一性からいえば、一つの原語に対して一つの訳語が対応しているのが理想なのですが、多彩な背景をもつ質的研究だからこそなのか、なかなか思うようにはいかない事態に出会い、その都度委員の間で議論して解決の方向を探りました。たとえば、constructivismと対比的に用いられることが多いconstructionismの語に対しては複数の訳語があって、現状では、個々の執筆者の学問背景や立場によりどの訳語を用いるかが異なってい

ます。編集委員会で意見交換したり、より専門に近い先生にご意見を求めたりして統一を試みたのですが、どこかに不整合が残り、結局はそれぞれの訳語にカッコに入れて原語を付記するという形の決着となりました。辞典としてはスマートさに欠けるといえますが、これも複数の学問分野から発展してきた質的研究の特徴としてご容赦いただければと思います。

また、辞典という本書の性格上、原則的には、それぞれの項目はその概念の簡明な定義から入るよう執筆者の先生方にお願ひしました。なかなか定義が難しい概念もあり、ご苦勞をかけたりもしましたが、なんとかこのような形でまとめることができ、編集委員一同安堵しているところです。ただ、読者の皆さんに心に留めておいていただきたいのは、どの定義もあくまで今の時点で共有されていたり、研究の土台とすべきと考えられていたりする暫定的なものにすぎないということです。質的研究は常に言葉と格闘しており、その過程で定義自体もまた修正されていきます。ですから、広辞苑の改訂が現在も続いているように、本書もまた一定期間の後に改訂されていくべきものと考えます。

本辞典が完成するまでには、執筆者の先生方も含め、非常に多くの方のお世話になりました。特に京都大学名誉教授のやまだようこ先生には、編集作業におきましても見出し項目の選定と整理および辞典の形式の決定にご尽力いただきました。また、最後になりましたが、本書が学会15周年記念出版として実現したのは、終始きめ細かな進行管理と執筆者のサポートをしてくださった、新曜社の大谷裕子さんのおかげです。大谷さんは、企画段階からかわり、編集作業の実務のみならず、要所要所で貴重な提案をして本書を完成に導いてくださいました。編集委員一同、心より感謝申し上げます。

2018年10月

日本質的心理学会『質的心理学辞典』編集委員会
能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・
柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦

凡 例

1. 編集方針

見出し語はできるかぎり日本語表記を採用したが、適切な訳語がない場合や欧文の仮名読みが定着していると思われる場合については片仮名表記とした。英語の省略形の場合、通例となっている読みがある場合はルビを付した。

訳語が一定していない重要な学術用語は、当該項目著者の表記を尊重したうえで、なるべく英語を併記した。

外国語・外国人名は通例の読み方を採用した。「v音」は原則として「バ行」で表記しているが、「ヴ」の表記が通例となっている場合はそれに従った。表記が定まっていないと思われるものについては①併記する、②当該項目著者の表記を尊重するなどの対応をした。

異なる観点からの解説が必要と思われる項目は、同一表記の見出しを複数立て、副見出しでその内容の違いを示した。

2. 見出し語の配列

- (1) 配列はすべて五十音順とした。外国人名は姓の片仮名表記とした。
- (2) 濁音・半濁音は清音と見なし、その位置においた。
- (3) 長音の「ー」は、直前の片仮名の母音を繰り返すものとした。
「オーラルヒストリー」は「オオラルヒストリイ」
- (4) 促音の「ッ」、拗音の「ャュョ」などは、独立の一字と見なした。
「アタッチメント」は「アツツチメント」
- (5) アルファベットは対応する文字ごとに仮名読みした。ただし、通例となっている読み方がある場合はその位置においた。
「AVデータ」は「エエブイデエタ」
「TEA」は「テイ」
- (6) 記号の「・」「／」「＝」などは無視した。
- (7) 同一の見出し語が複数ある場合は、副見出しの五十音順または英語表記のアルファベット順とした。

3. 見出し語の表記

- (1) 見出し語に続いて、原則としてその英語表記を付した。必要に応じてドイツ語〔独〕、フランス語〔仏〕なども掲げた。
- (2) 人名項目には〔 〕内に生（没）年を付記した。
- (3) 見出し語だけでは内容がわかりづらい場合や同一表記の項目については、「一」のあとに副見出しを付した。
「指標 一現象理解の一」
「相互行為 一エスノメソドロロジーにおける一」
「相互行為 一社会心理学における一」
- (4) 見出し語のうち解説のないものは、⇒で示す項目を参照していただきたい。
「人工物 ⇒媒介物」

4. 本 文

- (1) 外国人名には原綴または英語表記を付記し、日本人名にはルビを振った。
- (2) 本文中の用語に外国語表記が併記されている場合、それは著者の意向による。
- (3) 邦訳がある書籍は日本語表記とし、原著の初版出版年を付記した。邦訳がない書籍は原著名をイタリックで表記し、原則として初版出版年を付記した。

5. 参照項目

- (1) 本書収載の見出し語のうち、関連するものを本文末尾の「⇒」に続いて五十音順に列記した。
- (2) 独立項目とはしなかったが重要と思われる用語については索引に含めたものもある。あわせて参照していただきたい。

6. 索 引

事項索引（和文・欧文）、人名索引（和文・欧文・執筆者名）の5種類がある。和文・欧文索引は、いずれも見出し語に加えて重要と思われる用語・人名を採った。

編集委員・執筆者一覧

(五十音順)

編集委員会

編集代表	能智 正博	NOCHI Masahiro
編集委員	香川 秀太	KAGAWA Shuta
	川島 大輔	KAWASHIMA Daisuke
	サトウタツヤ	SATO Tatsuya
	柴山 真琴	SHIBAYAMA Makoto
	鈴木 聡志	SUZUKI Satoshi
	藤江 康彦	FUJIE Yasuhiko

執筆者

青木 美和子	AOKI Miwako	植田 嘉好子	UEDA Kayoko
青柳 肇	AOYAGI Hajime	上淵 寿	UEBUCHI Hisashi
青山 征彦	AOYAMA Masahiko	上村 佳世子	UEMURA Kayoko
秋田 喜代美	AKITA Kiyomi	ウェルズ 恵子	WELLS Keiko
浅井 亜紀子	ASAI Akiko	内田 伸子	UCHIDA Nobuko
浅井 幸子	ASAI Sachiko	浦田 悠	URATA Yu
麻生 武	ASAO Takeshi	江口 重幸	EGUCHI Shigeyuki
渥美 公秀	ATSUMI Tomohide	遠藤 利彦	ENDO Toshihiko
天谷 祐子	AMAYA Yuko	大倉 得史	OKURA Tokushi
綾城 初穂	AYASHIRO Hatsuko	大谷 尚	OTANI Takashi
荒川 歩	ARAKAWA Ayumu	大月 隆寛	OTSUKI Takahiro
有元 典文	ARIMOTO Norifumi	大橋 靖史	OHASHI Yasushi
安藤 史江	ANDO Fumie	岡田 美智男	OKADA Michio
飯牟礼 悦子	IIMURE Etsuko	岡田 光弘	OKADA Mitsuhiro
家島 明彦	IESHIMA Akihiko	岡部 大介	OKABE Daisuke
五十嵐 素子	IGARASHI Motoko	岡本 直子	OKAMOTO Naoko
五十嵐 靖博	IGARASHI Yasuhiro	岡本 祐子	OKAMOTO Yuku
石井 宏典	ISHII Hironori	岡本 依子	OKAMOTO Yoriko
石黒 広昭	ISHIGURO Hiroaki	沖潮(原田) 満里子	OKISHIO-HARADA Mariko
石丸 径一郎	ISHIMARU Keiichiro	小木曾 由佳	OGISO Yuka
磯村 陸子	ISOMURA Rikuko	奥田 紗史美	OKUDA Satomi
一柳 智紀	ICHIYANAGI Tomonori	小倉 啓子	OGURA Keiko
伊藤 崇	ITO Takashi	小保方 晶子	OBOKATA Akiko
いとう たけひこ	ITO Takehiko	尾見 康博	OMI Yasuhiro
伊藤 哲司	ITO Tetsuji	抱井 尚子	KAKAI Hisako
伊藤 直樹	ITO Naoki	香川 秀太	KAGAWA Shuta
稲葉 光行	INABA Mitsuyuki	香川 七海	KAGAWA Nanami
伊波 和恵	INAMI Kazue	蔭山 正子	KAGEYAMA Masako
今尾 真弓	IMAO Mayumi	檉田 美雄	KASHIDA Yoshio
岩壁 茂	IWAKABE Shigeru	鹿嶋 達哉	KASHIMA Tatsuya

春日 秀朗	KASUGA Hideaki	澤野 美智子	SAWANOM Michiko
勝浦 眞仁	KATSUURA Mahito	沢宮 容子	SAWAMIYA Yoko
金田 裕子	KANETA Yuko	柴坂 寿子	SHIBASAKA Hisako
金丸 隆太	KANEMARU Ryuta	柴山 真琴	SHIBAYAMA Makoto
上別府 圭子	KAMIBEPPU Kiyoko	渋谷 真樹	SHIBUYA Maki
菊田 知則	KARITA Tomonori	清水 睦美	SHIMIZU Mutsumi
河崎 美保	KAWASAKI Miho	庄井 良信	SHOI Yoshinobu
川島 大輔	KAWASHIMA Daisuke	東海林 麗香	SHOJI Reika
川野 健治	KAWANO Kenji	荘島 幸子	SHOJIMA Sachiko
河野 麻沙美	KAWANO Masami	白井 利明	SHIRAI Toshiaki
川村 久美子	KAWAMURA Kumiko	白水 始	SHIROUZU Hajime
川本 静香	KAWAMOTO Shizuka	城間 祥子	SHIROMA Shoko
神崎 真実	KANZAKI Mami	菅野 幸恵	SUGANO Yukie
岸 磨貴子	KISHI Makiko	菅村 玄二	SUGAMURA Genji
岸野 麻衣	KISHINO Mai	杉浦 淳吉	SUGIURA Junkichi
北澤 毅	KITAZAWA Takeshi	杉浦 健	SUGIURA Takeshi
北出 慶子	KITADE Keiko	鈴木 一代	SUZUKI Kazuyo
北村 篤司	KITAMURA Atsushi	鈴木 聡志	SUZUKI Satoshi
北村 英哉	KITAMURA Hideya	鈴木 岳海	SUZUKI Takami
木戸 彩恵	KIDO Ayae	鈴木 智之	SUZUKI Tomoyuki
木下 寛子	KINOSHITA Hiroko	鈴木 栄幸	SUZUKI Hideyuki
木村 優	KIMURA Yu	鈴木 宏昭	SUZUKI Hiroaki
金馬 国晴	KINMA Kuniharu	砂上 史子	SUNAGAMI Fumiko
鯨岡 峻	KUJIRAOKA Takashi	高木 光太郎	TAKAGI Kotaro
楠見 孝	KUSUMI Takashi	田垣 正晋	TAGAKI Masakuni
窪田 由紀	KUBOTA Yuki	鷹田 佳典	TAKATA Yoshinori
熊谷 高幸	KUMAGAI Takayuki	高橋 亜希子	TAKAHASHI Akiko
倉持 清美	KURAMOCHI Kiyomi	高橋 準	TAKAHASHI June
黒須 正明	KUROSU Masaaki	高橋 史子	TAKAHASHI Fumiko
小泉 拓也	KOIZUMI Takuya	TAKAHASHI, Masami	
古賀 松香	KOGA Matsuka	竹内 一真	TAKEUCHI Kazuma
児島 達美	KOJIMA Tatsumi	竹田 恵子	TAKEDA Keiko
小島 康次	KOJIMA Yasuji	田島 充士	TAJIMA Atsushi
小林 明日香	KOBAYASHI Asuka	田代 順	TASHIRO Jun
小松 孝至	KOMATSU Koji	田中 彰吾	TANAKA Shogo
近藤(有田) 恵	KONDO-ARITA Megumi	田中 共子	TANAKA Tomoko
戈木クレイグヒル 滋子	SAIKI-CRAIGHILL Shigeko	田中 美恵子	TANAKA Mieko
西條 剛央	SAIJO Takeo	谷口 明子	TANIGUCHI Akiko
斉藤 こずゑ	SAITO Kozue	崔 裕眞	CHOI Eugene
斎藤 清二	SAITO Seiji	辻内 琢也	TSUJIUCHI Takuya
坂上 裕子	SAKAGAMI Hiroko	辻本 昌弘	TSUJIMOTO Masahiro
佐久間 路子	SAKUMA Michiko	土屋 雅子	TSUCHIYA Miyako
桜井 厚	SAKURAI Atsushi	當眞 千賀子	TOMA Chikako
佐々木 正人	SASAKI Masato	徳川 直人	TOKUGAWA Naohito
佐藤 郁哉	SATO Ikuya	徳田 治子	TOKUDA Haruko
佐藤 公治	SATO Kimiharu	得丸 智子(さと子)	TOKUMARU Satoko
サトウ タツヤ	SATO Tatsuya	戸田 有一	TODA Yuichi
鮫島 輝美	SAMESHIMA Terumi	土橋 臣吾	DOBASHI Shingo
澤田 英三	SAWADA Hidemi	富田 昌平	TOMITA Shohei

豊田 香 TOYODA Kaori
 豊田 秀樹 TOYODA Hideki
 鳥越 信吾 TORIGOE Shingo
 内藤 哲雄 NAITO Tetsuo
 中川 善典 NAKAGAWA Yoshinori
 永田 素彦 NAGATA Motohiko
 中坪 史典 NAKATSUBO Fuminori
 中村 高康 NAKAMURA Takayasu
 中村 正 NAKAMURA Tadashi
 中村 雅子 NAKAMURA Masako
 中村 真由美 NAKAMURA Mayumi
 灘光 洋子 NADAMITSU Yoko
 西口 光一 NISHIGUCHI Koichi
 西村 ユミ NISHIMURA Yumi
 額賀 美紗子 NUKAGA Misako
 能智 正博 NOCHI Masahiro
 野口 隆子 NOGUCHI Takako
 野坂 祐子 NOSAKA Sachiko
 野村 直樹 NOMURA Naoki
 野村 信威 NOMURA Nobutake
 野村 晴夫 NOMURA Haruo
 南風原 朝和 HAEBARA Tomokazu
 朴 東燮 PARK Dongseop
 橋本 広信 HASHIMOTO Hironobu
 濱 雄亮 HAMA Yusuke
 浜田 寿美男 HAMADA Sumio
 原田 悦子 HARADA Etsuko
 東村 知子 HIGASHIMURA Tomoko
 日高 友郎 HIDAKA Tomoo
 比留間 太白 HIRUMA Futoshi
 廣井 亮一 HIROI Ryoichi
 広津 侑実子 HIROTSU Yumiko
 福井 雅英 FUKUI Masahide
 福島 真人 FUKUSHIMA Masato
 福田 茉莉 FUKUDA Mari
 福丸 由佳 FUKUMARU Yuka
 藤江 康彦 FUJIE Yasuhiko
 藤田 ラウンド 幸世 FUJITA-ROUND Sachiyo
 藤野 友紀 FUJINO Yuki
 文野 洋 FUMINO Yoh
 保坂 裕子 HOSAKA Yuko
 細馬 宏通 HOSOMA Hiromichi
 前川 麻依子 MAEKAWA Maiko
 前田 泰樹 MAEDA Hiroki
 益川 弘如 MASUKAWA Hiroyuki
 松島 恵介 MATSUSHIMA Keisuke
 松嶋 秀明 MATSUSHIMA Hideaki
 松本 光太郎 MATSUMOTO Kotaro
 箕口 雅博 MIGINUCHI Masahiro

操 華子 MISAO Hanako
 水野 節夫 MIZUNO Setsuo
 水野 将樹 MIZUNO Masaki
 三田地 真実 MITACHI Mami
 南 博文 MINAMI Hirofumi
 南山 浩二 MINAMIYAMA Koji
 箕浦 康子 MINOURA Yasuko
 箕輪 潤子 MINOWA Junko
 宮内 洋 MIYAUCHI Hiroshi
 宮坂 道夫 MIYASAKA Michio
 宮本 匠 MIYAMOTO Takumi
 無藤 清子 MUTO Kiyoko
 無藤 隆 MUTO Takashi
 村上 幸史 MURAKAMI Koshi
 村本 邦子 MURAMOTO Kumi
 村本 由紀子 MURAMOTO Yukiko
 本山 方子 MOTOYAMA Masako
 森 直久 MORI Naohisa
 森岡 崇 MORIOKA Takashi
 森岡 正芳 MORIOKA Masayoshi
 森下 伸也 MORISHITA Shinya
 茂呂 雄二 MORO Yuji
 安田 節之 YASUDA Tomoyuki
 安田 裕子 YASUDA Yuko
 ハッ塚 一郎 YATSUZUKA Ichiro
 矢吹 理恵 YABUKI Rie
 山口 智子 YAMAGUCHI Satoko
 山崎 浩司 YAMAZAKI Hiroshi
 山田 哲子 YAMADA Tetsuko
 山田 富秋 YAMADA Tomiaki
 山田 仁史 YAMADA Hitoshi
 やまだ ようこ YAMADA Yoko
 山竹 伸二 YAMATAKE Shinji
 山本 登志哉 YAMAMOTO Toshiya
 矢守 克也 YAMORI Katsuya
 横山 草介 YOKOYAMA Sosuke
 好井 裕明 YOSHII Hiroaki
 吉岡 有文 YOSHIOKA Arifumi
 吉村 夕里 YOSHIMURA Yuri
 若林 宏輔 WAKABAYASHI Kosuke
 若山 育代 WAKAYAMA Ikuyo
 和田 仁孝 WADA Yoshitaka
 渡辺 恒夫 WATANABE Tsuneo
 渡邊 照美 WATANABE Terumi
 渡邊 芳之 WATANABE Yoshiyuki

あ

アーカイブ

archives

多くの質的研究は音声や映像データを文字情報に変換したうえで分析し、その結果を研究成果として発信するが、原資料は一定期間経過後には処分されアクセス不能となる。しかし、特に貴重な資料や歴史的資料などへのアクセスが不能になったり、残存していても制限されることになったりすれば、せっかくの資料を十分に活用することができない。そこで、権利者・関係者の許諾を得たうえで、貴重な資料を保管し、他者が利用可能にするのがアーカイブである。アーカイブは、もともとは紙や現物など実物を残すことを指していたが、保管場所やアクセス可能性の問題もあり、デジタルアーカイブとしてインターネット上で公開されることも多い。その一例に、ディベックス・ジャパン (DiPex-Japan) がある。このようなアーカイブでは、それぞれ収集方法や資料整理の方針や方法が異なるため、質的分析を行うにせよ、数量的な評価を行うにせよ、注意が必要である。

⇒ データ収集と分析の往復、データの管理

[荒川 歩]

IRE 連鎖

IRE sequence

教育社会学者のミーハン (Hugh Mehan) が著書 *Learning Lessons* (1979) において、エスノメソドロジーや会話分析の知見を取り入れて定式化した、授業特有のシークエンシャルな組織 (sequential organization) のこと。具体的には、教師による発問 (initiation) - 生徒の応答 (reply) - 教師による価値づけ (evaluation) という教師-生徒間の行為連鎖である。この連鎖は生徒の発言の後にフィードバックとして教師の評

価的発言がなされる点で授業に特有であり、これをミーハンは授業の相互行為の構造の基本単位とみなした。そしてこの連鎖を通じた活動によって授業の開始、教授、終了の三つの局面 (phase) が生まれ、それが連なって授業が出来上がるとした。授業のあり方を教師と生徒の相互行為に基づいて示す手法は言語学、心理学の分野などにも影響を与え、IRE連鎖を端緒として会話分析の知見を援用した教室研究が展開していった。⇒ エスノメソドロジー、会話分析、ミーハン

[五十嵐素子]

IRB ⇒ 研究倫理委員会

iQOL

individual quality of life

個人の一人称的視点から定義づけられるクオリティ・オブ・ライフ (quality of life : QOL) 概念のことである。たとえば、心理学者のオボイル (Ciaran A. O'Boyle) は個人の生活の質評価法 (schedule for the evaluation of individual quality of life : SEIQoL) を開発した。SEIQoL は、当事者の具体的な体験や認識を重視した実存的なアプローチに基づく評価法であり、半構造化インタビューと視覚的アナログ尺度 (visual analog scale : VAS) を併用する。QOLに関連すると認識する項目を当事者自身が選定し、各項目間の充足度 (level) と相対的重要度 (weight : 重み) を評価するという特徴をもつ。これにより、個人の状況と生活環境との相互作用により変容するリアルなQOLを把握することができる。患者中心型のQOL評価として、今後さらなる発展が期待されている。⇒ クオリティ・オブ・ライフ、実存

[福田茉莉]

あいだ

aida

自己が生命との根拠に支えられて世界と出会う際の原理、自己を成立させる根拠。木村敏は文化に根ざす暗黙の知である「あ

いだ(間)」という概念によって、精神病理学を独自に発展させた。あいだは物理的な空間や時間ではなく、生命との関係で自己を成立させている根拠を指す。自己が主体として生きるということは、行為的にも感覚的にも生命の根拠とのつながりを維持していると同時に、間主体的な世界を維持することである。音楽の合奏にたとえると、各パートの音はぴったり合っているのに、感動をもたらさないことがある。逆に、互いの音が微妙にずれているのに、感動的な演奏が実現することがある。後者の演奏は音と音を合わせるのではなく、音と音のあいだを合わせている。あいだに依拠することが水準の高い合奏を実現する。他者とのあいだに依拠しつつ自己であるという自己の二重化を生きることの困難さから、精神病理が派生する。精神病の根源は個人ではなく、個人と個人の関係性、あいだにある。そのため病いの治癒にはあいだの回復が重要になる。⇒木村 敏 [森岡正芳]

愛着 ⇒ **アタッチメント**

アイデア・ユニット

idea unit : IU

文章理解や作文などの認知研究において1970～80年代によく使われた指標で、文章や発話の共通性や多様性を分析する際の統語的な単位である。たとえばある文章を読み、理解した内容の再生を求める際、再生率を知るために元の文章をアイデア・ユニットに分割し、それらがどの程度再生されたかを算出した。ユニットには単語単位、節単位、命題単位などがあり、分析の目的や文章の長さ、説明文か物語かといったジャンルなどの属性によって適した単位が選択される。さらに、文章や発話中の表現に対するアイデア・ユニット同定のための基準は研究ごとに厳密に定義される。アイデア・ユニットにレベルを設定することで難易度の高いアイデア・ユニットが再生されたかを評価したり、カテゴリーを設定

することで特定のアイデア・ユニットの言い換えや抽象化といった表現の特徴をとらえたりできる。⇒指標—現象理解の一、ナラティブ分析、分析単位 [河崎美保]

アイデンティティ

identity

「自分は～である」という自己規定が、周囲の他者や集団から承認されることで得られる自己確信や集団所属感のこと。エリクソン (Erik H. Erikson) は、そのライフサイクル論において、人生の各段階に用意された心理・社会的問題(危機)が適切なかたちで解決されることで健全なパーソナリティが発達していくと考えた。「アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散」は第Ⅴ段階(青年期)の危機であり、青年は職業決定を猶予されたモラトリアムの期間に、それまでに身につけた資質・能力・欲望・思想などを再編してまとまりのある自己をかたち作り、それを職業などの具体的な社会的役割に適合させることによって、自分が何者であるかを自分自身や周囲の他者に証明していくとされる。アイデンティティの感覚はそこに成立する。逆に、自己の再編がうまくいかなかったり、自己規定が他者や社会から承認されなかったりすると、自己についての不確かな感覚(アイデンティティ拡散)が生じる。⇒自己・パーソナリティ、ライフサイクル [大倉得史]

IPA

interpretative phenomenological analysis

現象学と解釈学と個性記述学を理論的支柱とする、人間の生きられた経験の意味を調べる質的研究アプローチ。定訳はないが、解釈的現象学的分析と訳されることが多い。1990年代半ばにスミス (Jonathan A. Smith) が開発し、彼と共同研究者が発展させた。現象学が人間の経験の一般的構造に関心をもつのに対し、IPAは特定の経験をした人間の個人的な意味に関心をもつ。したがって、たとえば怒りの経験そのものを

調べることが研究設問（リサーチクエスチョン）なら現象学を採用するのが適切だが、医療場面での患者の怒りの経験を調べるのが研究設問ならIPAを採用するのが適切である。IPAのデータ収集法は主に特定の経験をした一人から数人を対象とする半構造化インタビューで、分析方法は解釈学的循環に基づいてトランスクリプトを読んで経験の意味を解釈することである。これまでに病気やセクシュアリティ、精神的苦痛などの研究に使われてきた。⇒解釈学、解釈学的循環、現象学、個性記述的方法、スミス

〔鈴木聡志〕

あいまいな喪失

ambiguous loss

あいまいな喪失とは、家族や恋人など親密な関係において経験される喪失のうち、失われてしまったのか、それとも、いまだ失われていないのか、存在／不在についての不確実性がある喪失のことをいう。家族療法家、家族心理学者のボス（Pauline Boss）が提唱した。①身体的には存在していないが心理的には存在している場合、②身体的には存在しているが心理的には存在していない場合の二つのタイプがある。①の具体例には、行方不明兵士、誘拐された子ども、人質・拘禁、移民、養子縁組、離婚、転勤、離家（別居）した成人子、②の具体例には、認知症、慢性精神病、脳疾患、アディクション、仕事への過度のコミットメントなどがあげられる。あいまいな喪失の場合、喪失が「一時的」か「最終的」かも不明確なため、長期間、当事者の意味づけや対処、悲嘆の過程を凍結してしまうのである。⇒死別、喪失、ナラティブ（ナラティヴ）、悲嘆

〔南山浩二〕

アカウンタビリティ

accountability

具体的な場において、ある行為や活動をそれとして観察することができ、それが何かを報告することができること。エスノメ

ソドロロジーに特有のこの概念は、ガーフィンケル（Harold Garfinkel）が翻案したもので、すべての場と行為に伴うものである。それぞれの場における、それぞれの行為や活動には、言葉や視線、道具の配置などを組織し、デザインすることで可視性が与えられる。その場にいる人たちは、このアカウンタビリティによって「次に何をすべきか」が理解できるようになる。社会秩序を産出するためには、いつでも、このアカウンタビリティ、すなわち参与者への可視性が担保されなければならない。アカウンタビリティという語には、すでに述べた、①一目でそれが何かが分かること以外に、②分かりやすい説明責任が求められること、という意味がある。②に関して、サックス（Harvey Sacks）は、不適切な行為には、それに対する理由説明が「適切な関連性（レリバンス）」をもつという、行為の規範的な構造について指摘している。⇒エスノメソドロジー、ガーフィンケル、サックス、相互反映性、レリバンス

〔岡田光弘〕

アクションリサーチ

action research

現場の当事者と研究者が共にことをなすこと。正確には、当事者と研究者がともに共同当事者としてことをなすことを通して、共同知を生み出すための研究活動。問題解決を志向した実践研究と称されることもあるが、アクションリサーチの鍵は問題解決への関与性自体ではなく、問題解決にあたって当事者と研究者とが形成する独特の関係性（共同当事者）の方にある。よって、アクションリサーチを、アンケート調査、参与観察といった個別の調査手法と同列に議論することは適当ではない。これらの手法をどのような関係性のもとで活用するかが問われている。共同知の鍵は、知と信の融合にある。このことは、専門知の乱立とそれに伴う知に対する信の崩壊が深刻な現代社会において、重要な意味をもつ。アクションリサーチは、共同知だけでなく、知

を生みだす側にまわることで得られる信を当事者に生みだす。⇒一般化可能性、参与観察、実践研究、実践知、実践の中の理論、当事者研究 [矢守克也]

アクターネットワーク理論

actor network theory

フランスの社会学者であるラトゥール (Bruno Latour) や、カロン (Michel Callon) が提唱したアプローチ。細菌やホタテ貝、新交通システムなど、非人間の生物や人工物も人間と同様にアクターと見なして、これらの異種混交のアクターからなるネットワークとして社会をとらえる点に特徴がある。具体的には、その場の関心の中心となっているもの (義務的通過点) を基点にして、そのときのアクターの振る舞いや交わされた言説をもとに、それぞれのアクターが義務的通過点に対してどのような布置連関をなして、それが時期によってどのように変化したかを検討する。人間と非人間とを完全に同様に扱う点については批判も多いが、人間が自分の意志で行為しているようにみえたとしても、そのプロセスにはさまざまな非人間がかかわっていることを明確にした功績は大きい。関連して、カロンは、人間と非人間とが組み合わさった主体として、ハイブリッド・コミュニティという概念を提示している。⇒カロン、ハイブリッド・コミュニティ、ラトゥール

[青山征彦]

アクティブ・インタビュー

active interview

ホルスタイン (William J. Holstein) とグブリアム (Jaber F. Gubrium) が提唱した、コミュニケーション、あるいは相互行為としてのインタビュー法である。アクティブ・インタビューにおいては、調査者も回答者もアクティブな聴き手であり、アクティブな物語の語り手である。調査者は従来の中立的立場を捨て、むしろ、回答者が物語を産出しやすい環境を整え、彼らの語りを積

極的に援助する役割を担う。アクティブな回答者は調査者と協同して、調査場面に持ち出されるトピックを手がかりとしながら、その場の相互行為状況や自分の経験をリソースとして、物語を紡ぎ出す。アクティブ・インタビュー法を採用すれば、調査者と回答者の協働的な物語の産出過程全体が研究対象となるので、従来のように回答だけを分析するのではなく、調査者自身の行為や語りも分析の俎上^{そじょう}に載せなくてはならない。つまり、遂行したインタビューのプロセス全体について、克明なエスノグラフィーを作り出すことが必要になる。⇒インタビュー、エスノグラフィー [山田富秋]

足場かけ

scaffolding

一人では成し遂げられない目標や実践への参加に対して、適切な援助が与えられることで課題達成を可能にすること。工事現場などで高所作業のために設置される「足場」を比喻に用いられる。ヴィゴツキー (Lev S. Vygotsky) による「発達の最近接領域」を理論的手がかりに、1976年にウッド (David Wood) らによって初めて使用された用語である。問題解決やスキル獲得を支援するチューターの機能、および手続きのモデルとして示された。なお、一人で達成可能な水準に達した場合には、支援は不要となることからその過程を fading (足場はずし) という。従来、足場かけは学習を支援する教師や熟達した仲間によって行われるものとみなされてきたが、近年、教師－学習者の二者関係以外を対象とした学習過程でも適用されている。また、学習科学領域では、学習支援にかかる関係性や学習環境を概念提示された当時よりも広範にとらえ学習環境デザインの原理として適用される動向がみられる。⇒学習科学、発達の最近接領域、ブルーナー

[河野麻沙美]

遊び

play

遊びとは、暫定的には、楽しく、自発的で、内発的で、実目的をもたず、それ自体として完結する活動である。「あれが遊びだ」と指し示すとして、それも人により示す現象が異なることもある。すべての特徴を併せもつというより、部分的なのである。それは家族的類似性によりつながった一連の現象であり経験であり、遊びと遊びでないものは連続的である。ピアジェ (Jean Piaget) によれば、遊びを行動で示すと、機能的、象徴的、ゲームと分けられる。内的属性として分けると、内発的動機づけ、目的より手段への注目、遊びと探索の区別、道具的行動との対比、外的ルールからの自由、能動的かわりなどがあげられる。文脈としては、馴染み、自由選択、最小限の大人(管理者)からの干渉、ストレスがないことなどがある。それらの特徴の多くを満たしている活動はより遊び的と見なされる。核となる特徴をとらえるとすると、自発的、くつろぐ、すぐには機能的でない、行動が繰り返され、誇張され、断片化、非連続的である、などがある。⇒ ごっこ遊び、ピアジェ [無藤隆]

アタッチメント

attachment

アタッチメント(愛着)とは、生物個体がある危機的状況に接し、不安や恐れなどの負の感情が喚起された時に、特定の他個体に文字通りくっつく(attach)ことを通して、安全の感覚を回復・維持しようとする欲求および行為傾向を指す。ヒトの子どもも、これによってもたらされる安全の感覚に支えられて、外界への探索活動を安定して行い、また相対的に円滑な対人関係を構築することが可能になる。すなわち、子どもにとって、主要なアタッチメント対象は、危機が生じた際に逃げ込み保護を求める「安全な避難所」であると同時に、ひとたびその感情状態が静穏化した際には、今

度は、そこを拠点に外の世界へと積極的に出ていくための「安心の基地」として機能することになる。こうした仕組みは、乳幼児期においてはもっぱら養育者などへの物理的な近接としてあるが、発達の進行とともに徐々に特定他者への信頼の感覚や近接可能性に対する見通しといった表象的な近接へと変じていき、まさに生涯全般にわたって人の心身の安寧や適応を高度に保障するに至る。⇒ 親子関係、関係性、母子関係 [遠藤利彦]

新しい教育社会学

new sociology of education

1970年代以降に、既存の教育社会学の理論・方法・対象への反省に基づき、英国を中心として展開された一つの学問的立場。その特徴は、①理論的にはシンボリック相互作用論、現象学的社会学、エスノメソドロジーなどに依拠し、相互行為における行為者の解釈の介在を強調し、②それをとらえる方法として、エスノグラフィーやインタビューといった質的な研究法を主として採用し、③従来の教育社会学が等閑視しがちであった教育知識の選択や伝達方法を含むカリキュラムの問題や、教師－生徒関係に代表される教室内相互作用など、学校の内部過程に着目する、というものであった。英国の教育社会学者ヤング (Michael F. D. Young) によって1971年に刊行された論文集『知識と統制』は、「教育社会学の新しい方向」という副題がついており、実質的な「新しい教育社会学」宣言の書として、今日においても、教育社会学における質的研究や解釈的アプローチの動向を振り返るうえで起点となっている。⇒ 解釈的アプローチ、教育社会学、質的社会学、ミクロ社会学 [中村高康]

厚い記述

thick description

文脈と意味を大切にしてい行為や出来事を記述すること。ギアーツ (Clifford Geertz)

が文化の解釈的理論を論じる際に言及し、現在では文脈の丁寧な記述を指して用いられている。行為や出来事の意味は文脈と切り離せない。たとえば「少年Aの右手が少年Bの肩に3秒間接触した」という文脈抜きでの記述では、行為の意味（暴力行使なのか、呼びかけなのか）がわからない。一方、「公園で少年Aが、遊び仲間の少年Bに駆け寄り、笑顔で肩に手をかけ…」というように文脈を「厚く」とらえた記述は、行為の意味を浮かび上がらせている。容易には理解しがたい異文化を調べるときに、厚い記述がとりわけ重要となる。行為や出来事の意味は、前後の状況から社会歴史的背景まで際限なく広がり、複雑に絡み合い、一貫性をもつとも限らない。厚い記述は、たくさんの事実をだらだらと列挙するものではなく、錯綜した文脈から意味を浮上させるものでなければならない。⇒意味、エスノグラフィ、解釈的アプローチ、ギアーツ、文脈 [辻本昌弘]

アディクション

addiction

嗜癖 (addiction) は、アルコール、薬物、ギャンブル、インターネット、ゲームなどの習慣への耽溺を意味する。一方、依存症 (dependence) は医学的定義であり、物質使用がその人にとって以前にはより大きな価値をもっていた他の行動より、はるかに優先するようになる一群の生理的、行動的、認知的現象であり、この定義を満たさない場合は「乱用 (abuse)」である。DSM-5 (精神疾患の診断・統計マニュアル) では乱用と依存症を統合したが批判もあり、その点、急性中毒、有害な使用、依存症、離脱状態などを区別するWHO (世界保健機構) によるICD-10の定義は有用である。物質や行動への依存は、人への依存の不足が問われる状態ともいえる。しかし、日本のアルコール依存症治療は、「底をつかなければ回復しない」という現場の知恵が逆に規範となり、あるいは医療者が薬物依存を犯罪とみ

ることで、当事者を支援から排除してきた側面がある。抱えている苦痛や困難をアディクションで「やり過ごしている」当事者を支援の対象とし、各種の社会資源につながるものが求められる。⇒サバイバー、自助グループ [川野健治]

アドボカシー

advocacy

一連の研究プロセスにおいて、研究者が研究対象者の権利や利益を擁護すること。アドボカシーは本来、弁護、支持、唱道などの意味をもち、法律と密接に関連した言葉である。近年になって、医療、社会福祉などの分野において、患者や障害者、高齢者など、権利の主張に困難を抱える人びとの支援において注目されるようになり、分野横断的に重要な概念となっている。なお、アドボカシーは政治学分野においても用いられるようになってきているが、この場合、政策提言、つまり特定の問題についての政治的な提言を行うことを意味する。研究における研究対象者のアドボカシーには、単に研究対象者の権利を守るという倫理的配慮のみならず、研究プロセスにおいて得られた研究対象者の声に、研究者が耳を傾け、拾い上げるとともに、それらの声を支持・擁護・代弁するということもおのずと含まれる。⇒高齢者、障害児・者、倫理 [今尾真弓]

ATLAS.ti

ATLAS.tiは、質的データ分析を支援するソフトウェア (CAQDAS) の一つであり、ドイツのATLAS.ti Scientific Software Development社が開発・販売している。PC版 (Windows、Mac OS) だけでなく、iOS版とAndroid版がある。日本語を含む多言語のテキストデータの分析をサポートしている。ATLAS.tiは、グラウンデッド・セオリー・アプローチや内容分析など、質的データ分析のさまざまな手法を支援するよう設計されている。ATLAS.tiを

用いたデータ分析では、文書中のテキスト、映像、音声、画像などの質的データに対するコード化やメモ書きを画面上で行う。定義されたコードやメモのリンク構造はATLAS.tiが維持・管理するため、紙やスプレッドシートを使った分析に比べてデータ管理の作業が大幅に効率化される。ATLAS.tiの特徴は、視覚的なデータ管理の機能が標準で備えられていることである。たとえば、コードの階層関係を管理する機能、コードやメモの関連性をネットワーク構造で表す機能がある。また2017年現在の最新版では、地理空間へのコード化もサポートされている。⇒NVivo、コード化、質的データ分析、MAXQDA [稲葉光行]

アナロジー

analogy

アナロジー（類推、類比）は、未知の事象を説明・推論するために、類似した既知の事象を利用した認知活動である。第一に、複雑な構造や機能の説明（例：心臓の働きをポンプで説明）、暗黙知や技の伝達、婉曲的なコミュニケーション（例：寓話、心理療法）で用いられる。第二に、既有知識領域からの類推転移による推論（例：原子構造における電子運動を、惑星の周回運動に基づいて推論）や過去の類似事例を利用する問題解決で用いられる。類推は、演繹や帰納と並ぶ推論の一つとして、あるいは、帰納の一種として位置づけられる。第三に、創造（例：回転寿司をベルトコンベアから着想）においても利用される。第四に、理論構築（例：脳をコンピュータ、社会行動をゲーム・劇・テキストとみなす）においても大きな役割を果たしている。特に、質的心理学では、人間を物語（ナラティブ）とみなすことで、多様な意味や現実をとらえようとしている。⇒学習転移、帰納、言語ゲーム、メタファー [楠見孝]

アフォーダンス

affordance

アフォーダンスは英語の動詞アフォード

(afford) からのギブソン (James J. Gibson) の造語で、環境が動物に与える意味や価値である。物質、媒質、面にアフォーダンスがある。硬い物質は動物の移動を妨げるが、住居や道具や武器などを作る。物質の一種の水は、洗う、渴きをいやす、絵の具の溶液になる。食物は物質である。いずれも物質のアフォーダンスである。約20%の酸素を含む媒質の空気には均質性があり、光や振動、揮発する微小物質を周囲に拡散している。空気は呼吸や移動、そして視覚、聴覚、嗅覚のアフォーダンスである。物質と媒質の間にある面の配置は多様である。周囲には大別して、持ち運べる物（遊離物 detached object）と地面から離せない物（付着物 attached object）の配置がある。アフォーダンスの多くは動物が地球上に現れる前からあり、動物の進化をアフォーダンスが可能にした。アフォーダンスは動物の行為を調整、制御するが、刺激のように行為を引き起こさない。⇒ギブソン、生態学のアプローチ、生態学的环境、生態心理学、ダーウィン、知覚システム [佐々木正人]

アブダクション

abduction

問題となっている事象を最もあり得そうな仮説や理論に結びつけていく推論形式で、「仮説生成」と訳される場合もある。推論結果はまだそれ自体で正しさを保証するものではないものの、新たな資料収集や検証作業を刺激し、方向づける機能をもつ。たとえば、「○○山で貝塚が発見された」ことに対し、「貝は海でとれる」という知識をもとに、「○○山は昔海岸だったのだろう」と仮の説明を構築するのがこれにあたる。可能な説明は複数あり得るが、それまで見落とされていたところに注目した説明を発想するところに、この推論形式の価値がある。アブダクションはギリシア時代より、帰納、演繹と並ぶ第三の推論の方法としてあげられてきたが、科学的発見に不可欠なものとして詳細に論じたのは哲

学者のパーズ（Charles S. Peirce）である。質的研究では、KJ法で「発想法」に対応する語とされたほか、グラウンデッド・セオリーではデータから理論を構築する作業の中心に位置づけられている。⇒ 演繹、帰納、研究の理論的枠組み [能智正博]

アプロプリエーション ⇒ 専有

安倍淳吉（1915–1993）

Junkichi Abe

東北大学において「安倍社会心理学」とも呼ばれる独自の体系を構築し、犯罪非行や地域社会に関する研究を推進した社会心理学者。人格・社会・文化の出会いという観点から人間性（human nature）を追究した。また、微視的水準（心的過程）にも巨視的水準（大社会）にも片寄らない中間的水準から研究を展開させる中間接近法を唱えた。少年院や刑務所を舞台にした調査では、収容者の派閥発生と施設側の統制のダイナミズムなどを分析するとともに、戦争前後の仙台のアンダーワールドを犯罪者がいかに生き抜いたのか、その実態を明らかにした。下北半島での青年期社会化の調査では、近代化の波及に直面した農漁村や地方都市における青年の進路選択を論じた。⇒ 社会心理学、中範囲の理論、犯罪、犯罪心理学 [辻本昌弘]

アリストテレス〔前384–前322〕

Aristotle

ソクラテス（Socrates）、プラトン（Plato）と並ぶ、古代ギリシアを代表する哲学者。ギリシア哲学の完成者。それまでの哲学の世界説明における問題点を解消し、質料因、始動因、形相因、目的因の四つが事物の変化や運動の原因になると考えた（四原因説）。また、プラトンのイデア論を批判し、物の真の姿、普遍的な本性は目の前にある物それ自体に含まれている、という新しい考え方を主張。従来の哲学を統一的な言葉にまとめあげ、体系化したことで、後

の哲学に大きな影響を与えた人物でもある。哲学以外でも、政治学、心理学（『靈魂論』）、文学、天文学、生物学、レトリック論（『弁論術』『詩学』）、解釈学（実践知）など、幅広い知識の持ち主であり、「万学の祖」と呼ばれている。⇒ 形而上学、認識論

[山竹伸二]

暗黙知

tacit knowledge

行うことはできるが、明示的に言語化できない知識のこと。科学哲学者ポラニー（Michael Polanyi）が科学的実践のもつ特性を説明するために用いた概念。彼は一般に信じられているような科学の普遍的で没個性的な理解を批判し、科学的知識の背後には、明示的には語れないが、やろうと思えばできるタイプの知識が存在し、それが科学全体を支えていると主張した。それが暗黙知で、そのなかには自転車を乗りこなす、人の顔を識別するといったさまざまな能力が含まれる。こうした暗黙知は歴史的、身体的に構成されるため、ポラニーは、科学的知識は同時に人格的知識（personal knowledge）でもある、と主張した。この暗黙知概念は、ライル（Gilbert Ryle）の knowing how といった概念とも通底するが、後に科学社会学者のコリンズ（Harry Collins）は、より実証的な見地からラボラトリー実践における身体的技能の重要性を強調し、経営学では野中郁次郎らが、暗黙知を形式化し共有するプロセスがイノベーションの基礎となるという知識経営論を展開した。⇒ 科学社会学 [福島真人]

い

イーミック／エティック

emic / etic

「イーミック」な視点とは当該フィールドの内部者の視点を、「エティック」な視

点とはほかのフィールドとの比較に関心のある研究者（外部者）の視点をいう。言語学の用語である音素的（phonemic）・音声的（phonetic）に由来する。フィールドの文化的特徴を理解するためには、当事者が自らの行為を意味づける方法や当事者にとって意味のある概念を見だし、それを使って個別の文化を内側から記述する一方で、文化交差的に妥当なパターンと一致する人びとの行動を通文化的に適用可能な概念を用いて、外側から追究することも必要となる。エスノグラフィーは、フィールドへの参与を通して「内部者の視点」をつかむ一方で、「外部者（プロのよそ者）の視点」から観察した事象を体系化するという、複眼的な視点からフィールドの文化を理解する方法である。社会経験のプロセスを当事者の視点から解明しようとする質的研究において、この対概念は、自らの研究の特性を明確にする重要な視座となる。⇒異人の目、エスノグラフィー、第三の視点、フィールドワーク

[柴山真琴]

e-ラーニング

e-learning

学習のための素材をオンラインで配信するような教育形態またはシステム。1990年代後半、インターネット技術の発展と普及を背景として、サーバー上においた知識伝達型教材を、Webブラウザなどを介して遠隔地から閲覧するような教育システムが主に企業内教育、高等教育の場で利用され始めたのが起源である。e-ラーニングという用語が一般化したのは2000年前後である。オンラインのメリットによりさまざまな学習者層を対象として広範囲に教育コンテンツを配信できることから教育の多様化や民主化への寄与が期待される。一方で、学習者と教師、学習者同士が顔を合わせることがないため参加意識が希薄となり、ドロップアウト率が高くなる傾向が指摘されている。これらを解消するために、オンライン上の学習者コミュニティの形成

支援、学習継続を促すメンタリング、対面授業と組み合わせるブレンディッド型学習形態などが研究されている。⇒インターネット、教育工学

[鈴木栄幸]

意義と意味 ーヴィゴツキーによるー

meaning and sense in Vygotsky

一般に、意義と意味はどちらも記号によって指示される内容や事物を指すが、ヴィゴツキー（Lev S. Vygotsky）は、言語的思考の発達過程を分析するなかで両者を区別するよう提起した。彼によれば、意味とはある語を知覚する際に個人の意識の内部に起こる出来事全体である。意味は文脈に応じて多様であるとともに、その個人の発達にしたがって変化する。一方で、意義とはある語とともに生じる複合的な意味のうち相対的に安定した部分を指す。したがって、辞書に書かれた語の説明は意義を表すものである。ヴィゴツキーにとって語の意味とは、言語と思考が一体となった機能全体を分析する単位でもある。なぜなら、意味は個別の経験に共通性を見いだす一般化という思考の一つの働きであると同時に、語によって媒介された言語的現象でもあるからである。⇒ヴィゴツキー、経験と体験、分析単位

[伊藤 崇]

育児ストレス

parenting stress

育児において、その養育にかかわる者が感じる負担感をいう。日本では、類似した概念として育児不安という語も用いられている。ツルニッチ（Keith A. Crnic）とグリーンバーグ（Mark T. Greenberg）は、育児ストレスには、貧困や離婚といった大きなライフイベントが背景にあるものから、育児が予定通りにいかないなど日常の小さな厄介まで、その重大さの程度には相違があることを指摘した。さらに、日常の小さな厄介を受容し対処することによって、大きなストレスに発展させないことが重要であると述べた。ラザルス（Richard S. Lazarus）と